内田寛一教授の歴史地理学上の位置と学風

菊地利夫

一　はしがき

ヨーロッパの地理学にもっともすぐれている国々と同じように、日本においても三つの歴史地理学が芽ばえて成長した。三つの歴史地理学はすべて京都に芽生えた。京都は実に日本の歴史地理学の発祥地であった。このうち二つは京都に成長して全国にひろまった。しかしその一つに東京に移って開花し、ここから日本中にひろがったものがある。これは内田寛一教授の歴史地理学である。この学風についてここにすべてを述べることは容易ではない。それは広くかつ深いだけではなく、今なお発展しつつあるからである。また私がこれを述べる適任者でもないことにもよる。それは全国にこの学派に属するすぐれた歴史地理学者が多いからである。しかしこれらの人々は他の重要な問題について本紀要に執筆しているし、また編集委員会からの命令によって私の手に負いないような問題にペンをとるわけに至ったものである。しかも執筆に当って恩師内田寛一教授にその学風をいまだ充分に理解しえないことをお詫びもしなければならないし、同学の先学諸兄に私の能力の不足を広告したような結果になったことはやむをえない。この小論のように唯々この難問題を粗描しえたのみに満足しているわけではない。ふたたび機会をえてこの学風の本質と屋開過程を追求できるときに完全なる責任を果すことの御了解をえたい。

二　歴史地理学における三つの学派

日本における歴史地理学の発達史をかんがえるとき、地理学一般や他の科学の場合と同じように、少数の優れた人々によって飛躍的にこの科学がおしすすめられたことを認めなければならない。しかもこれらの人々が果した役割は、歴史地理学の一般的な啓蒙化・普及化のみではなく、日本における歴史地理学の学説・学派の樹立者という偉大な功績を打ちたてた人々であることを銘記しなければならない。日本における歴史地理学の発達史において、このような位置にある人々を多少の異論はあるかもしれないが、大体は一致するであろう。学説学派の形成年代順にこれをあげれば、喜田貞吉教授と内田寛一教授と小牧実繁教授の三人である。日本の歴史地理学者は人文地理学の方法論としての歴史地理学、すなわち広義の歴史地理学を共通地盤としながら、さらにその上に立って三つの歴史地理学の学派をつくっている。この三つの学派のそれぞれの先頭にこれらの三人が立っているわけである。

京都大学の喜田貞吉教授は歴史地理学とは歴史の地理的解釈であるという立場をとって、他の学説よりもっとも早くこれを主張し、早稲田大学教授であった故吉田東伍教授と同じ立場にあり、東西にならびたって早くも明治末の日本に歴史地理学を発達させた。この立場の学説・学派の樹立者としては、後継者がすくない吉田東伍教授よりも喜田貞吉教授をおさねばならない。この学風は明治末から京都大学を中心として興り、歴史地理学だけではなく、史学一般の発達にも貢献している点が多い。歴史に対する地理的解釈すなわち地理的歴史は、歴史地理学の三つの学派のうちでもっとも歴史学に接近している立場である。日本における歴史地理学は、まず歴史学への親縁性をもって樹立されたことは、喜田貞吉教授が東京大学国史科の卒業生であり、京教大学に籍をおいた所が文学大学史学科であったこ

とにもよろうが、ヨーロッパの国々の歴史地理学の発達過程と同じものであることは、およそ歴史地理学の発達するためにたどらねばならぬ必然的なプロセスであったからであろう。

京都大学を中心として発達したもう一つの歴史地理学は小牧実繁教授の理論である。小牧実繁教授は日本における先史地理学の開祖であり、政治地理学の興隆に果した役割も大きい。しかも一つの歴史地理学を主張して、多くの後継者を養成した。その立場は昭和八年の岩波の地理講座「歴史地理学」をはじめ、多くの論文に述べられている。同書に「歴史時代における或る時の断面に於ける土地地域を復原し再現して、地理の原語が示す如く、過去に於ける土地を描出するのが歴史地理学の使命職能である」(1)という。この立場にたつ歴史地理学者がはなはだ多くが、最近の主張されている藤岡謙二郎氏の景観変遷史法はこの立場とまったく同じではない。小牧実繁教授の歴史地理学は、過去のある時間における断面の地理、すなわち先史時代の地理、古代の地理・中世の地理・近世の地理などのように、さまざまの時間的断面における地理を想定している。そこにこの立場は歴史学にはなはだしく接近している地理的歴史よりも、歴史学から解放されて空間的であり、時間性より空間性が濃厚である。しかし過去の地理を復原することを主として、これを現在の地理との関連を求めることがないので、「過去を説明するための歴史地理学」である。この歴史地理学の理論は世界の歴史地理学者の多くの人々によって早くから支持されている理論であるが、日本においてこの立場の確立は世界の地理学の先進国よりむしろ遅かったと思われる。

この二つの学説・学派にたいして、地理性の強い歴史地理学の見解は、東京文理科大学を核心として研究活動をつづけた内田寛一教授の学説である。それは「現在の地理事項に含まれている歴史性を地理学の対象としようとして生れた歴史地理学」(2)の主張である。この歴史地理学の立場は明らかに二つの目的が述べられている。「現在のものの

地理的意義を闡明するのに歴史地理的検討が必要であり、また地理的活動の史的展開を明らかにする必要がある。」(3)ここでいわれる地理的活動の展開とは「人が自然をいかに利用開発しているかという地理的活動が、いかなる過程を経て現状となったか、今後どうすれば時世に応じて一層人々の目的を達成しうるか」ということである(4)。この学説の特色は明らかに歴史地理学の機能を「現在における地理的事実を明らかにすると同時に、将来へのサジュスションを得よう」(5)とすることにある。歴史時代の景観復原を主とする立場が「過去を説明するための歴史地理学」であるとすれば、この立場は「現在を知るための歴史地理学」である。この歴史地理学の立場は喜田貞吉教授の学説より三〇年もおくれて提出されたが、小牧実繁教授の学説より一〇年も先に発表されたものである。この立場について後節にて再説するが、日本の歴史地理学者のうちで、この学説を継承支持する人々が全国的にひろまり、歴史地理学における三大学派の一つを形成している。また世界の国々においてもこの立場を主張する著名な歴史地理学者がはなはだ多いのである。

私はここでは歴史地理学の三学説の特色を比較しようとするのではない。また他の二つの学説についてはこれを説明する分担が定っている。私はまたこの偉大な地理学者のほぼ半世紀にわたる学問的活動の全貌を明らかにすることも要求されていない。私の与えられた問題はその一つの歴史地理学に関する分野だけであり、しかもその理論を歴史地理学の発達史の中に位置づけることである。内田寛一教授の歴史地理学の理論は最初に主張した大正十四年の「地理学研究上に於ける史的観察の分野」地理教育・二巻二号と最近の発表である「歴史地理の重要性」、昭和二十七年・人文地理・三号五・六合併号と比較すれば、約三〇年間にわたって変ることなく自説を主張してきたことを知るのである。日本においてその同調者はますます増加しているが、世界の国々にもこの歴史地理学立場による人々が増加し

てきた傾向が認められる。

三　著書・論文からみた学的活動

内田寛一教授の学的生涯はいまでもおとろえることなくつづいている。半世紀にわたるながい学究生活とおびただしい数に達する論文には何人も驚かずにはおられない。大正二年京都大学文科大学史学科を卒業したときは二十五才、そして昨年（昭和三十三年）に古稀の祝賀記念論文集を出版し、その祝賀会に出席するまでの四十五年間に出版した著書は九冊・地図帳一二冊・主な学術論文三八七を数えられる。著書の中には大著「経済地域に関する諸問題の地理的研究」（昭和九年）は経済地理学者としての半面を示すものであり、経済地理学の古典となっているものである。「初島の経済地理に関する研究」（昭和九年）の名著は地理学界のみならず、農業経済学界にまで愛読され、経済地理的面を強調した歴史地理学の実証的研究である。「郷土地理研究」（昭和八年）は本邦唯一の体系的な郷土地理学書であり、学校地理に郷土学習がさかんになるたびに反覆して愛読されている。これらの著書は内田寛一教授の文部省在外研究員として二ケ年のイギリス・ドイツ留学から帰朝し、東京高等師範教授兼文理科大学助教授に就任した時の執筆である。しかし本格的な著書はなお今後に出版されると思われる。文理科大学に在任した昭和八年から同二十四年までに研究した分野の著書はいまだ出版されていないからである。また戦前・戦後を通じて編集した十二冊し地図関係のうちでも、「最新日本地図」・「最新世界地図」・「日本産業地域図」などは何人も追随のできない創意にみちた特色を持ったものであるといわれている。

内田寛一教授の著書 論文の統計

年度＼分野	地理学理論	経済地理学	政治地理学	歴史地理学	集落地理学	地理教育	その他	地図関係	著書	計	年齢
大正 2—7			8				3			11	25～30
7—11			2			4	2	1	1	10	31～35
昭和 12—2	13		2				2			17	36～40
3—7	19	26	11	1	5	2	8	5	2	79	41～45
8—12	41	8	14	24	5	8	4		3	107	46～50
13—17		17	17	28	4	16	2			84	51～55
18—22	3		7		3		3		1	17	51～60
23—27	13	21	5	4	6		5	6	2	62	61～65
計	89	72	66	57	23	30	29	12	9	382	

本統計にも最近数十年間の論文数は加つていない。

学術論文については地理学関係に限らず、歴史学・教育学や外交・経済関係にわたって発表範囲は広く、したがって論文の数も多く、しかも多種多様にわたっている。主な雑誌は「地理教育」・「地理と経済」・「地理」・「地学雑誌」・「新地理」・「人文地理」・「地理学評論」・「地理学」・「社会地理」・「郷土科学」・「社会と学校」・「歴史教育」・「歴史公論」・「東洋」などのほかに、二三種合計四七種にわたっている。その外に「大塚地理学会論文集」や「日本大学地理学会誌」の毎号に論文を掲載し、さらに五つの古稀・還暦記念論文集に招待されて、そ学的饗宴に列している。

ほぼ半世紀に近い期間における三八七の論文は、その発表してきた過程をみれば、内田寛一教授の学的活動の推移はおのづと明かになる。その内訳は地理学理論に関する論文の八九篇がもっとも多く、つづいて経済地理関係が七二篇、政治地理関係が六六篇、歴史地理関係が五七篇、集落地理関係が二三篇、地理教育の主論文が約三〇篇、その他が二九篇となっている。この内容からみて学説創始者・学派形成者にふさわしく、理論的研究の多いことはさることながら、経済地理・政治地理関係の論文が歴史地理関係の論文の発表数よりも

多いことは、これらは内田寛一教授の得意中の得意とする分野であることを物語っている。

次の論文統計は五年毎の年齢層に分けたものである。㈠二五―三〇才（京都大学院学生・京都大学助手時代）、㈡三一―三五才（文部省図書監修官時代）、㈢三六―四五才（東京高師教授・浦和高校教授時代）、㈣四六―六五才（文理科大学助教授・教授時代）、㈤六六才―現在（日本大学大学院教授時代）。この五段階にわけて論文発表の増減傾向をみよう。㈠と㈡の時代の発表した論文にそれぞれの段階に十一篇と十篇である。㈠には政治地理関係の論文に集中していることが特色である。当時は第一次大戦後であって、民族問題が世界の大問題となっているときであった。若い内田寛一教授は、学生時代に法学の講義単位を多くとったほどに、歴史地理学者よりむしろ政治地理学者であった。文部省時代に「世界改造の地理」を稿了したが、ついにこれは出版されなかった。しかし政治地理学の論文が六十六うち四十二篇も発表されたのは四〇―五五才の期間で、もっとも地理学が円熟した文理科大学篇の時代であった。㈢の時代は東京高師教授として活潑な研究生活がくりひろげられたときで、前半の五ケ年の論文は一七篇、後半の五ケ年の論文は七九篇と激増している。この時代には理論が三二篇、経済地理が二六篇、政治地理が一一篇であるが、歴史地理学の論文はただの一篇にすぎない。しかしこの一篇こそ内田寛一教授の歴史地理学の基本的本質論を最初に発表した記念すべき論文であることは後述の如くである。

学者としての活動期のクライマックスがいかなる年齢層にあるかを調べることは興味深い問題である。偉大な学者はその一生を貫く独創的見解は若いころに芽生えて、これを完成するのは壮年期をすぎたころである。この学説完成期が学的活動のクライマックスに当っている。内田寛一教授のクライマックスは㈣の時代の前半に当る四六―五五才までの一〇年間であった。四六―五〇才までの論文は実に一〇七篇、五一―五五才までの論文は八四篇であった。そ

の後の五六―六〇才までの論文一七篇は第二次大戦中の一時的減少であるが、平和恢復してからの六〇―七〇才までの論文は約七〇篇である。四六―五五才までの最高の活動期一〇年間はもっとも特色があらわれた時代であった。時代を風びした「地人相関理論」は四六―五〇才に四一篇を発表して完成し、その後には「地人相関理論」の発表はほとんどみられない。これにたいして経済地理学の論文は一つ前の年齢層である四一―四五才にもっとも多く発表された。この十年間の代表的なものは歴史地理学の五二篇、政治地理学の三一篇、地理教育の二四篇である。この政治地理学も歴史地理的色彩の強いことが一つの特色である。かくて歴史地理学の研究は全盛期から現在にまでつづいてくるのである。現在の研究の重点も、もっぱら歴史地理学の実証的研究にあることは変りない。近いうちにこれらの歴史地理関係の論文が集大成されて、斯学の最高権威としての著書が出版されることが待望されるのである。

四　歴史地理学論史上の位置

日本における歴史地理学の学派は三つあるが、そのうち二つはヨーロッパに学説が提出されたことが早かった。日本においてもっとも早く形成された学派の「歴史の地理的解釈」は、明治二十二年（一八九九年）に、喜田貞吉教授と吉田東伍教授などが設立した日本歴史地理学研究会の立場であるが、これは、その後身である今の日本歴史地理学会にまで延長されている。この立場は、イギリスの地理学者のフリーマンの「ヨーロッパの歴史地理学（一八八〇年）も、ドイツ地理学者フリードリッヒ・ラッツェルの「人類地理学」（一八八二年）のサブタイトルが「歴史への地理的適用の綱領」といい、アメリカのF・C・センプルの「地理的環境の影響」（一九一一年）も、あるいはフランスのヴィダル・ド・ラ・ブラシュやジァン・ブリュンヌもまた同じであり、L・フイブルの「大地と人類の進化」（一

九二二年）のサブウイトルは「歴史の地理学的序論」であった。すなわち「歴史の地理的解釈」という立場は、ヨーロッパにおいては、P・クレエヴェルの著「古代ゲルマニア」・「古代イタリア」などのように一七世紀に起源はあったが、その確立は一九世紀末と考えることが至当であろう。日本には「歴史の地理的解釈」は、これより約二〇年遅れて移植されて発展したのである。

これに対して、歴史地理学とは過去の地域・景観を復原する科学という立場は、論文としてはドイツのF・マルテの「地理学の概念・目的と方法」（一八七七年）や、A・ヘットナーの「地理的研究と内容」（一八八五年）が先駆的であり、著書としては、ドイツのJ・ウインマーの「歴史景観学」（一八八五年）やA・ヘットナーの「地理学・その歴史・本質と方法論」（一九二七年）がある。ウインマーは「景観が人間占居によってうける変化を系統的に説明することを主張し、ヘットナーは「ある地域の歴史地理学は論理的には、その歴史のすべての時期について可能であり、それは各時期について別々に書かれるべきもの」(6)であると説明している。この立場の歴史地理学が成立したのは、ヨーロッパでは一九世末から二〇世紀初期で、「歴史の地理学的解釈」を歴史地理学とする立場よりも一時期も遅れている。日本においても、この立場の歴史地理学が小牧実繁教授によって樹立されたのは一九三二年であった。

内田寛一教授の歴史地理学の概念「現在の地理的事象に含まれている歴史性を対象とする学問」という立場は、一九二五年の地理教育誌二巻二号から上・中・下三回に分けて発表されたものである。これは内田寛一教授の一九二四年に東京高師史学会における講演速記録を加筆して発表したものである。この立場は、イギリスのW・G・イーストが「その著「地理学の精神と目的」（一九五一年）の中に「現在の地理的事実を明らかにするために、過去の地理を復原する……地域の現在の地理を理解するために地理的事実をつくったプロセスを明らかにする」(7)ことが歴史地

理学の本質と機能であって、歴史の地理的解釈と区別しなければならないことを主張している。イーストがこの立場に立ったのは一九三〇年代の著書の「歴史の背後にある地理学」（一九三八年）や「ヨーロッパの歴史地理」（一九三五年などである。イギリスの古い歴史地理学者のH・マッキンダーの「歴史地理学は歴史的現在の研究である。過去に実在した現在にさかのぼって、その時代についてあまねく思考しなければならない」(7) という主張や「一八世紀以前のイギリスの歴史地理学」（一九五一年）を編著したH・C・ダービイの立場とは異なる。同じ立場を著者にもっとも早く述べたのは、アメリカの景観地理学者のC・O・サワーであろう。サワーはその著「文化地理学の最近の発達」の中で、「文化景観の変化を明らかにし、異なる時代の土地利用の状態がいかに移り変ったかを説明すること、時代ごとに土地利用をいかに再編成されたかを説明すること、これらは歴史地理学の論理上から当然の発言である」(9) として、景観の変遷もまた歴史地理学の正当なる分野の一つであると述べながら、「歴史地理学の研究の重点は現在における歴史的景観である。現在の文化景観のうちで、その歴史的起源が過去にあるものは歴史地理学の対象である。これは科学として成立するための便利な簡単化の方法である」(10) と明言している。サワーのこの見解はアメリカのH・バローの「人類生態学としての地理学」（一九二三年）やイギリスのF・アンステットの「地理学と歴史地理学」（一九二二年）などの雑誌に掲載された諸論文を参考にしたものであろう。また一九二八年にドイツのH・ハッシンガーも「歴史科学と地理学との関係」にも同様な見解を述べている。「現在を説明するための歴史地理学」の立場は、ヨーロッパにおいて確立していた同じ時期に、内田寛一教授によって日本においても成立していたのである。最近になって、世界各国の歴史地理学者の見解がしだいに一致点に向うようになった定義を、世界においてもっとも早く主張した人々のうちの一人に、内田寛一教授を数えることができることはまちがいのないことである。しか

しここに注意しなければならぬことは、これらの人々の主張は微細な点においては必ずしも一致しないことである。

しかしこの歴史地理学の概念が、内田寛一教授にとっては論文として発表する十年前の京都大学の在学中にすでに芽生えたものであると考えられる。大正二年七月の卒業論文は「秦嶺の研究」というテーマであった。当時は中国の奥地研究が世界の地理学者の関心の的であった。秦嶺の調査だけでも、ドイツのリヒトホーヘン、ハンガリーのシヘニ、オーストリアのロッチなどの報告書が出版されていた。小川琢治教授からアジア地誌の講義をうけ、同教授に私淑した若き日の内田寛一教授は卒業論文のテーマとして「秦嶺の研究」を選んだことは不思議はない。この「秦嶺の研究」には後年の主張した歴史地理学的な意味で史的研究法が必要であることを力説されてあった。この歴史地理的見解が京都大学の学生時代に胚胎したものならば、当時の諸教授からの思想的影響を考えられるであろう。試みに地理学・歴史学の当時の主な教授をあげれば、中目覚教授のタキタスのゲルマニア（ラテン語講読）とアメリカ経済地理、小川琢治教授のアジア地誌、喜田貞吉教授の日本歴史地理（国境の変化について）、内田銀蔵教授の国史概説と課外の統計学、桑原隲蔵教授の東洋史、内藤虎次郎教授の東洋史などである。この顔ぶれからみれば、内田寛一教授にその歴史地理的概念の形成するに役立ったのは、喜田貞吉教授の歴史地理学よりも内田銀蔵教授の史学方法論や小川琢治教授の地理学的見解であったと想像される。しかしこれらの諸教授に共通に流れていた考え方が内田寛一教授の地理学思想に影響したものとして見逃しえないことである。それは京都大学は明治末から昭和初期にかけて日本において歴史学地理学の歴史主義の最高牙城であったことである。私はこのような人的環境の外にむしろ物的環境をも強調すべきであると思う。それは京都大学の地理学教室が使用したフィールドである。京都盆地・奈良盆地・近江盆地や大阪平野などの地方は、古い過去のさまざまの時代に成立した地理的事象が現在にまで存続していることについ

て全国のどこにも比類がない。ここを背景として日本における歴史地理的見解のすべてが誕生したことは当然の結果であるかもしれない。これらの方法論は優れた地理学者たちがこの地方の地理的事象を理解しようとするとき、これらの人々の脳裡におのずからに発想したものであろう。この物的環境は客観的には同一のものであるが、喜田貞吉教授・内田寛一教授・小牧実繁教授と主体が異にすれば、そこに成立する歴史地理学的理論は、歴史的見解としては共通の地盤に立ちながらも、三つの異なる方法論を形成せしめたのであった。

五　「現在を説明するための歴史地理学」の基本的な概念

常識的には歴史学は過去の事実を説明し、地理学は現在の事実を説明するといわれている。歴史は過去を知り、地理は現在を知るとか、地理は現在の歴史であるとはよくいわれる。歴史地理学は、広義の地理学の中に含まれている限り、その機能は地域の現在の地理を明らかに理解することでなければならない。人文地理学は地理的事象を静態的に説明するが、歴史地理学は現在における地理的事象がつくられたプロセスを明らかにすることで、多くの過去の地理的事象が現在にまで続いていることから、過去に手がかりのある地理的事象を研究することである。したがって、第一に、歴史地理学はなによりも過去のさまざま時代に発生した地理的事象が現在という時点においていかなる意義を持っているか、すなわち歴史的現在を分析することが重要であろう。内田寛一教授のこの問題点の分析をやや長文にわたるが引用しよう。

「現在の地理事項にあっては、現時の環境――自然環境及び人文的環境共に――と対照して、十分に其の意義を明らかにし得る部分があると共に、到底これを明らかにすることのできない部分もあるべき筈である。換言すれば、現

代的の部分と非現代的の部分はあらゆる現在の地理事項に認められるべき筈である。そしてこの非現代的の部分こそ過去の歴史の余命であって、その中には現時なほ文化的価値を有して一種の現代的気分を発揮しているものもあり、又何等の価値をも有しないものもあるのである。前者はこれを「現在せる生ける歴史」といい得るならば、後者はこれを「現在せる死せる歴史」又は「化石せる歴史」といい得るであろう。「化石せる歴史」といえども過去の或る時代にあっては「現在せる歴史」として地理上意義の深い文化事実であった。」(11)

あるいはまた現在の地理的事象を分析して、「現在の地理事項の常態とは、古い歴史と新しい歴史との融合全体であり、古い歴史は変化し難かった部分であり、その他の変化し易い部分が新しい歴史に変ったもの」(12) と説明される。われわれが現在の地理的事象という領域は、「化石せる歴史」の部分と、「現在せる生ける歴史」の部分と、「現在に発生した部分」とに分析できるのである。したがってこれを「識別するにあらざれば、現在の地理事項を対象とする研究も、けだし十分に其の目的を達することは覚束ない」(13) と注意を喚起できるのである。

第二に過去に成立した地理的事象が過去を経過して現在に至ることが、いかにしてできたかということを明らかにされねばならない。それは内田寛一教授の理論の中では「継続性」の概念である。「現在の地理事項に過去を蔵し、歴史を含んでいるといっても、必ずしも過去をそのままの意味で蔵し、歴史をそのままの意味で含んでいるとは限らない」(14) という。過去の地理的事象は成立当時そのままでは継続していないのである。ある時代に成立した地理的事象は、現在にいたってみれば、「変化し難かった部分」が現在において古い歴史」といわれる部分であり、「その他の変化し易い部分」が「新しい歴史に変ったもの」といわれる部分である。また換言すれば、ある時代に成立した地理的事象のうち「変化し難かった部分」がほとんどそのまま現在に至ったものであり、変化し易い部分が「新しい歴

史となって時世の波に応ずるように（古い歴史）に織り成された」(15) のが、現在における地理的事象の在りかたである。非歴史地理学ではあまりにも変化し易い部分、すなわち「新しい歴史」のみを研究対象にとりあげすぎて、変化し難かった部分、すなわち「古い歴史」に気づかないでいる欠陥が目立つことを、イギリスの歴史地理学者イースト が注意を喚起した盲点でもある。

第三に先史時代・古代の地理とか、中世・近世の地理とか、さまざまの時代の地理は「現在のための歴史地理学」からみていかなる意義を持っているか、すなわち時代性の問題である。「現在を明らかにすると同時に将来へのサジェスションを得る」ためには、「地理的活動の東西古今に共通性のものと特殊なものが識別され、今後の活動の進展に大きな推進力が与えられる」のである。このことを可能ならしめるために「時代をいつまでさかのぼればよいかといったようなことは、事項によって自然に定まってくることであって、一概に規定すべき性質のものではない」(16) という。かくて内田寛一教授の歴史地理学の全体は、古代・中世・近世産業革命期やその他などの歴史地理学や考古地理学、さらにパレオ・ジオグラフイまでも包含している。これらの各時代の地理は平等なる重要性を持っていない。それは言外の意味から推察すれば、「現在のための歴史地理学」にとっては、各時代の重要性が現在の地理を説明するに貢献する程度いかんによって定っているのである。各時代の価値は現在に対してそれぞれ異なり、また場所によっても各時代の重要性は異なるであろう。

内田寛一教授の歴史地理学の主要概念は、これらの「歴史的現在」・「継続性」と「時代性」などの外にも多くあげることができるが、紙数の都合で割愛せざるをえない。これらの概念は三五才に発表した「地理学研究上に於ける史的観察の分野」から、最近の六五才に発表した「歴史地理の概念」にまで、三十年以上も一貫して同じ立場を発展さ

せたので、その学説内容は深く広い。その基盤は四五―五〇才時代に発表した「地人相関理論」がある。また多数の政治地理・経済地理・歴史地理などの個々の実証的研究にも、主要概念の生長・深化が認められる。しかも今なお内田寛一教授の歴史地理的概念と理論は発展しているから、その学説の完成と体系化は将来の問題として俟つべきであろう。

六　近世の歴史地理研究の創始者

内田寛一教授の論文は政治地理・経済地理・集落地理・交通地理の多方面の分野に及んでいるが、すべて広義の歴史地理学方法論によって貫かれていることが特色である。政治地理の分野では、小川博士還暦記念史学地理学論叢の中の「我が南洋諸島に於る気候と着衣問題との関係を論ず」という名論文や、「地理と経済誌」における「漁場の県界に及ぼしたる影響」（昭和十一年）や田中啓爾先生退官記念論文集の「国界・県界としての北利根川」（昭和二十五年）などの代表的論文は歴史地理的方法論によるものである。経済地理においては、名著「初島の経済地理に関する研究」（昭和九年）をはじめ、石橋博士還暦記念論文集（昭和一一年）の「農村の耕地と人口との関係の一面」や「地理と経済」誌の「農村の耕地と人口の関係一面」（昭和一一年）などが歴史地理的手法による範例であろう。また集落地理の分野では、集落地理学論文集（昭和一〇年）の「多摩川上流域の集落―特に氷川村の集落について」や「地理」誌の「日支廻城集落差別観」（昭和一四年）、日本学術協会報告第六巻の「九十九里平野に於ける人文の発達と海岸線の変化」などは、集落研究を歴史地理的見解でつらぬかれたものである。交通地理においても「新地理」誌の「仁科三潮及び糸魚川街道地帯における交通」（昭和二十三年）などはその学風を示すものである。

しかし内田寛一教授のもっとも得意であるは近世の村落人口の研究であろう。「地理と経済」誌の「武蔵野西窪村宗門人別帳の研究」（昭和一一年）は畑作村落の人口現象について、「地理」誌の「徳川時代農村における戸口増減の相関々係」（昭和一六年）は水田村の人口現象について、「新地理」誌の「九十九里浜における農業と水産業との関係―片貝村宗門人別帳の研究」（昭和二四年）は漁村の人口現象について、また「日本大学文学部研究年報」の「梓山村の性格」は鉱山村の人口現象について、さらに「地理」誌の「徳川時代における全国的人口」（昭和一五年）や吉田静致博士古稀記念論文集（昭和一六年）の「徳川時代農村中の特異なる人口現象」などがある。この近世村落人口の研究は大塚地理学会論文集第二輯「熱海初島における耕地と戸口と家系との関係の一面について」の論文が昭和九年に発表されたことが最初である。同九年に「初島の経済地理的研究」にこのような論章が多く掲載されているので、近世村落人口は昭和九年以前にさかのぼることは推察できる。

内田寛一教授のこの研究は日本における三大潮流をつくった。一つは貝塚や条里などを主に研究する方法、二つは古い歴史書・古紀行書などから歴史の地理的解釈する方法に対して、近世の村落文書とフィールド・ワークを兼用して近世の歴史地理を研究する方法は内田寛一教授が地理学の分野においての創始者である。そして近世の村落文書を研究資料としたのは、隣接の社会経済史学や史学一般よりも早い。むしろ史学一般では近世研究は史学に入らないと極言する人もあり、近世文書を読解・使用法を知る人もすくない。社会経済史学会は比較的に近世の問題をとりあげたが、昭和九年に創立されてからは、むしろ唯物史観の摘用が中心となっている観があった。黒正巌教授と小野武夫教授との「百姓一撥」の論争や太閤検地・小作制度・新地主・新田開発などがとりあげられたが、近世の村落文書による実証的研究によるものではなかった。史学界で近世文書を本格的にとりあげたのは終戦後からと言ってもよいだ

ろう。

内田寛一教授は歴史地理学の実証的研究にこの近世の村落文書を早くからとりあげたことは特筆すべきであろう。この動機・着想は近世の歴史地理の創始者の名をもってよばれる当然の資格を持っていることを何人も否定できないであろう。内田寛一教授は文部省に在任時代のころ、第一次大戦後の世界的不況の中に農村振興会議が設置され、その委員として活躍した。このときの会議はマルクシズム論争に終って会議は空転したので、村落資料を近世から現在に至るまで集めること、とくに村落の実態は近世を明らかにしなければ理解できないことを痛感したことによる。この時村落に近世文書が豊かに残存していることにきづいていたのは、小川琢治教授の助手時代に近世の正保図・元禄図などを集めた経験からであった。昭和初期に郡制廃止され、郡役所の所蔵文書が古本屋に出ることが多く、本郷の木内書店は近世文書を手に入れるよい店であったといわれる。最初に集めた近世文書は村々の検地帳と宗門帳であった。耕地・検見・人口などから近世村落の実態を把握しようとする研究がはじまったのである。資料採訪の最初は武蔵野開拓の研究で大正十年ころであった。一ケ月余の病気の後に、保養をかねて貞子夫人とともに武蔵野の村落の名主の家々を訪れて古文書を採訪した。これが今日の日本の歴史地理学の三大潮流の一つの始りであった。それから四十年後の今日は、日本の有名な歴史地理学者にしてこの研究法に立脚している人々がはなはだ多い。内田寛一教授の「近世村落人口の研究」はようやく完成されて、最近のうちに出版されるであろう。それは日本の歴史地理学の最高峯を示すものとなろう。古稀の年齢をこえてもなお研究の情熱はいささかも衰えることがないことは、今後もない日本の歴史地理学界の最高指導者としての活躍がつづくであろうことが期待されるのである。

註 (1)小牧実繁 歴史地理学 岩波地理学講座 昭和八年

(2) 内田寛一　歴史地理学の概念　歴史地理学の諸問題　七頁
(3)
(4)　前掲論文　八頁
(5)
(6) A. Hettner; Pie Geographie, ihre Geschichite, ihre Wesen und ihre methoden, 1927, S.131～132
(7) S. W. Wooldridge & W. G. East; The Spirit and purpose of Geography; 1951 p. p. 81～102
(8) H. Mackinder; Comments on the relation of history to geography, Geogr. jowrn, 1931
(9)
(10) C. O. Sauer; Recent Development of Cultural Geography, 1927, p. p. 70～71
(11) 内田寛一　地理学研究上に於ける史的観察の分野　地理教育二巻二号
(12)
(13)
(14)
(15)
(16) 内田寛一　前掲(2)歴史地理学の概念